

チェルノブイリ原発事故によって奇形は増加したか？



チェルノブイリ原発事故前後における、欧州奇形児・双子登録データベースの比較

**欧州先天異常監視機構（EUROCAT）9カ国18地域：**  
 事故前後で奇形発生頻度の**変化なし**

**フィンランド、ノルウェー、スウェーデン：**  
 事故前後で奇形発生頻度の**変化なし**

**ベラルーシ：**  
 汚染地域かどうかに関わらず流産児の**奇形登録増加**  
 報告者バイアスの可能性あり※1

**ウクライナ：** 今世紀にEUROCAT参加  
 Rivne州のポーランド系孤立集落で**神経管欠損増加**  
 放射線に加え、**葉酸欠乏、アルコール依存症、近親**  
 婚などの影響を評価する必要あり※2

※1:Stem Cells 15 (supple 2): 255, 1997 ※2 :Pediatrics 125:e836, 2010

放射線が、これから生まれてくる子どもたちにどのような影響を及ぼす可能性があるのか、チェルノブイリ原発事故前後の先天奇形の発生頻度については、さまざまな報告がなされています。欧州先天異常監視機構（EUROCAT）や、フィンランド、ノルウェー、スウェーデンの先天異常に関するデータベースを事故前後で比較した結果、奇形発生頻度に変化はみられませんでした。

ウクライナのRivne州、北半分のポリシヤ郡には、汚染地域で自給自足の生活を送っている人たちがいます。かれらは「ポリシチュクス(森の住人)」と呼ばれるとおり、森で野イチゴやキノコを採り、狩りや漁をして暮らしています。彼らの間で、神経管欠損が増えているという報告があり、放射線によるものかどうかについての評価が待たれています。

本資料への収録日：2013年3月31日

改訂日：2015年3月31日